Yoknapatawpha郡形成過程に於ける登場人物の「発展」について

——Sam Fathers と Ikkemotubbe を中心に——

内田智子

I

Faulkner のいわゆる「インディアンもの」の短篇の一つ、"A Courtship"(発表は1948年)の中に、次のような文章がある。美しいインディアンの娘をめぐって、インディアンの Ikkemotubbe と、白人の David Hogganbeck が争い、共に破れて第三の男に彼女を取られてしまった時に、二人が交わす会話である。まずイッケモテュッベが言う。

> "There was a wise man of ours who said once how a woman's fancy is like a butterfly which, hovering from flower to flower, pauses at the last as like as not where a horse has stood."
>
> "There was a wise man of ours named Solomon who often said something of that nature too, ... Perhaps there is just one wisdom for all men, no matter who speaks it."[1]

白人アメリカ人であるフォークナーが作品を書く場合、彼の立場はどうしてもディヴィッドの立場となり、彼の作品は、キリスト教の背景を持つも

のとなるが、[2] 彼はその立場から、異教的また異文化的な「インディアン」たちの世界を見る。異教的なものと、自らの持つ宗教的な要素の、共通項や違いを使い、作品に多様性を持たせるために、また、時には自らの立場を批判するためにも、彼の作品の「インディアン」たちは、彼の作品の重要な登場人物となる。

フォークナーの作品には、数作にわたって登場する人物がいる。それぞれの作品で、年齢が異なったり、性格が変ったり、*The Sound and the Fury* と *Absalom, Absalom!* に登場する Shreve のように、名前の姓が違ったりしていて、同じ人物が異なった作品中で必ずしも同じ役割をしているとは言いがたい。しかしだからこそ、その違いに着目してみれば、フォークナーがどのように人物のキャラクターを練り、また創作の力点をどう変えたかを知ることができるだろう。

本論文では、まず "A Justice" (1931年発行の *These Thirteen* に収録) という短篇にスポットを当て、この短篇に現われる登場人物たちが、その後他の作品との関連で、どのように Yoknapatawpha 郡に定着していったのかをみる。その上で、登場人物の「発展」の意味を探ってみたい。

II

「正義」が発表された1931年の2年前に『響きと怒り』が出版されたが、[3] この長編は "twilight" という題名の短篇が膨らんでできたものらしいことは、Millgate が早く指摘していたことである。[4] そして、「正義」に於ても、この "twilight" という言葉が、作品の鍵となっているようである。この短篇の語り手は、『響きと怒り』にも登場する、Compson 家の長男 Quentin であるが、彼は話の終でこう言っている。"We went on, in that strange, faintly sinister suspension of twilight . . ."[5]. クェンティン自身は、この "twilight" を、少年時代に感じる、大人の世界の不透明さ、謎と見做しているようである。夕暮の光、昼でも夜でもない光が不安と緊張の象徴とし

て使われる例は、フォークナーのクェンティンに限ったものではなく、例えばT. S. Eliot の *The Waste Land* (1922年発表)にも見られるが ("At the violet hour, when the eyes and back ／ Turn upward from the desk, when the human engine ／ waits"[6])、クェンティンの場合、この "twilight" は12歳の彼にとってまさに立ちふさがる壁のようである。クェンティンは言う。"I was just twelve then, and I would have to wait until I had passed on and through and beyond the suspension of twilight. Then I knew that I would know. But then Sam Fathers would be dead" (p. 360). では、"twilight" が少年時代の謎めいた世界だとすれば、このクェンティンが語っている現在、クェンティンはこの "twilight" を通り抜けて外に出られたのかどうか、つまり、成長して大人になったのかどうかということが問題になるが、テクストで見る限り、彼が大人になっているとは確定できないのである。"I *would* have to wait" や "I knew that I *would* know" また "Sam Fathers *would* be dead" (イタリック体はいずれも筆者) という文に見られる would の繰り返しはそれを物語っているのではないだろうか。Putzel は、クェンティンがもう大人になっていて、少年時代のことを思い出して語っていると述べているが、[7] 果してそうであろうか。確かに、現在のクェンティン、この語り手クェンティンは、Sam Fathers の、インディアンの父と、黒人女性の夫とが、この女性を巡って争ったという事実は把握できるようになっている。しかし、この二人の男の争いの事件についてのクェンティンの感想は一切書かれていない。つまり、ここでの語りは、"suspension of twilight" を抜けて、そこを振り向くという性格の語りではない。この短篇の語り手クェンティンは、この作品の場合は、やはり『響きと怒り』のクェンティンであって、Caddy の性的放縦さに絶望する以外、何も手を打つことのできなかった青年クェンティン、自殺する前のクェンティンであると考えても良いのではなかろうか。この黒人の女性が二人の男に愛されるという事実を、キャディーのことで悩んだクェンティンはやはり絶望的なものと見ているのではないだろうか。

さて、このようなクェンティンに、「正義」の中で「救い」は与えられていないのであろうか。そこで次にこの作品中で彼に話をするサムの方に注目してみよう。サム・ファーザーズは人々が「殆ど百歳近い」(p. 343)という老人であるが、休んでいるところに白人たちが来ても慌てる様子のない彼は、Dilsey のように "rocklike stability"[8] を持っており、彼が語る話が、何らかの人生の側面を提示した物語であることは間違ない。複雑な人種的背景を持ったサムのこれまでの苦難は想像するに難くないが、サムの父、インディアンの Craw-ford は黒人の男から、彼の妻をいわば横取りしたわけで、そこにインディアンが白人から引き継いだ、黒人への差別意識が絡んでいくようである(黒人の男がインディアンのクロー・フォードと妻との間に生まれた子［＝サム］を酋長の Doom ［イッケモテュッベは酋長になった時、名前をドゥームと変えている］に見せると、彼は "You should be proud of a fine yellow man like this, ... I don't see that justice can darken him any" (p. 357)と言う。黒人なら「自分より皮膚の色の薄い者に妻を取られても文句は言うな」と言わんばかりである)。インディアンの父によって儲けられ、黒人の男に育てられたサムはいわば、南部の抱える矛盾を生きぬいた実例としてクェンティンの前にあることになる。

然るに、この作品の中の彼の存在は、クェンティンを救いはしない。クェンティンには、サムと接触する機会が、祖父が亡くなるまでの土曜日の午後に限られていた上(p. 343)、1929年に出された『響きと怒り』を読んだ読者は、短篇の終で "twilight" の中を帰って行くクェンティンに、たとい青年になっていても、どれ程人生に立ち向かう力がついているのだろうかと、考えざるを得ないからである。そして何より、サム・ファーザーズは、後に *Go Down, Moses* (1942年発行)に登場する時とは違って、ここでは、森林の掟や狩の仕方を教えて、クェンティンを導くわけではない。

『行け、モーセ』では、サムは異教の立派な「祭司」となり、若者をひとりの狩人、つまりは精神的に自立した人間へと変えるのであるが、ここ

ではそうではない。つまり、この物語は、サムと、その話を聞くクェンティンとが揃っていても、サムがクェンティンを救いへ導くというわけではないので、新しい世界へと導くという意味での、イニシエーションの物語にはなり得ていないのである。

後に、『行け、モーセ』で、サムから教えを受けるのは、Issac McCaslinであるが、彼はクェンティンとは非常に異なっている。 アイクはクェンティンのように自殺することはない。サムから荒野の掟を学び、アイク自身が、遠い過去を知る老人として生き残った。彼も、"Delta Autumn" では、白黒雑婚をタブー視する社会通念を覆すことはできないし、[9] "The Bear" での、彼の土地の放棄は、逃避の観もなきにしもあらずであったが、[10] サムと共に少年時代の多くを過し、サムに猟を通してイニシエーションの儀式を施してもらっている。しかし、「正義」の時点では、サムの相手をしていたのはクェンティンであり、フォークナーはまだインディアンの話から、少年のイニシエーションへ繋がる物語は考えていなかったのである。

Ⅲ

次に『行け、モーセ』と「正義」の詳細な比較と分析を試みる。『行け、モーセ』の出版に先立つこと11年、「正義」が発表された1931年には、既にサム・ファーザーズが創造されていたという事実は非常に興味深いものである。この物語の中で、サムは "Had-Two-Fathers" という名前を与えられている。[11] つまり、インディアンの実の父と、黒人の育ての父の二人の父を持つという設定は、この時点で出来上がっていたのである。しかし、インディアンの父と黒人の母という組み合わせがもたらす内容は、この「正義」と『行け、モーセ』では異なっている。まず第一に、「正義」ではサムは、酋長のドゥームの息子ではなく、ドゥームの手下クロー・フォードと黒人女性との間に出来た子供ということになっている。「正義」では、この女性を巡る黒人の夫とクロー・フォードとの争いが描かれ、ドゥーム

はそれを眺める側に回ったが、『行け、モーセ』では、サムはドゥームの息子であって、ドゥームが即位した時、サムを身籠っている四分の一混血の女性と、黒人の奴隷との結婚をドゥームが宣言し、そういうわけで "Had-Two-Fathers" という名前を付けられることとなる。[12]

「正義」では、ドゥームは始めから最後まで、他人をペテンにかける人物として描かれている。ここでの彼は、サトペンのような悲劇的な大きさを持たぬ人物である。

しかし一方、『行け、モーセ』では、サムが酋長の血を受け継いでいるということからもわかるように、サム及びその父親のドゥームはギリシャ悲劇の典型的な悲劇的人物であると見做すことはできないであろうか。[13] ここでのサムは、

> an old man, son of a Negro slave and an Indian king, inheritor on the one hand of the long chronicle of a people who had learned humility through suffering and learned pride through the endurance which survived the suffering, and on the other side the chronicle of a people even longer in the land than the first, yet who now existed there only in the solitary brotherhood of an old and childless Negro's alien blood and the wild and invincible spirit of an old bear ; . . .[14]

と描かれている。つまり、「正義」から『行け、モーセ』という、同じような題材を使った物語に移行するにあたってフォークナーは、インディアンの民族精神や物語の悲劇性に焦点を移しているのである。

また、『行け、モーセ』で、ドゥームが、自分の子供を身籠った混血の女性を退ける話はサトペンの、混血の妻への仕打を思い出させる。[15] こう見ると、ドゥームはここでは「正義」のドゥームとは一変して、サトペンのような悲劇的人物となり得るのであり、そのドゥームのことを語る彼の

息子のサム・ファーザーズもまた、「正義」でのような、ただの昔話の語り手には納まらない。

サムの母親は、「正義」ではクェンティンの曾祖父に売られている(p. 344)。しかし、『行け、モーセ』では、アイクの曾祖父の Carothers McCaslin に売られている。[16] このことから見ても、フォークナーが、もともとのサム—クェンティン・コンプソンの組み合わせから、変更を余儀なくされ、サム—アイク・マッキャスリンという組み合わせを考えるようになったと推測できる。前にクェンティンとアイクを比較した時、クェンティンではイニシエーションの物語になり得なかったが、アイクの物語はイニシエーションの物語になっていると指摘しておいた。この場合、サムの相手をするのがクェンティンからアイクへと変ったことに加えて、サムのキャラクターについても、フォークナーは大幅に変更を加えている。

「正義」では、よく話ののみこめないクェンティンに、自分は実は黒人とインディアンの間に生れた者であるという話を聞かせるだけである。しかし、『行け、モーセ』では、サムはアイクが小さい時から、一人前の猟師になるまで実際に面倒を見る。

「熊」に出てくる、"pride" と "humility" というものの価値[17] や荒野の掟(これはサムがインディアンとして身に付けたものであるようだ)をアイクに教えるのはサムである。アイクの土地放棄は "Indian teachings" に類似していると Gidley は指摘しているが、[18]「熊」でアイクが土地を放棄することをみても、インディアンの血を引くサム・ファーザーズの教えは、アイクに伝わったことがわかるのである。

Ⅳ

さてこのように、『行け、モーセ』では異教的なものの価値が前面に出る格好となっているが、作品の底に、フォークナー自身のキリスト教の背景があることも忘れてはならない。"This whole land, the whole South, is

cursed, and all of us who derive from it, whom it ever suckled, white and black both, lie under the curse"[19]とアイクが叫ぶ時、彼はアメリカ南部が犯した、奴隷制に象徴される人間の罪を指しているのである。アイクが先祖伝来の土地を放棄し、ナザレ人イエスにならって大工になる、というくだりがあることなどをみても、彼がアブラハムの息子、神にささげられたイサクであり、彼は一つの犠牲となって罪を犯した土地を神に返した、という意味がこの作品に隠されているのも明白である。ただしフォークナーは、キリスト教そのものの価値はともかく、「キリスト教社会」アメリカが犯した罪の現実をみて、敢えて異教的な要素を、対照的に作品に登場させたと思われる。

フォークナーが、ヒューマニズム万能ではなく、宗教的な意味での人間の限界、「罪」を考えながら作品を書いていたことを示す、より明確な証拠がフォークナーの「インディアンもの」の中にある。それは、イッケモテュッベがドゥームと名乗るエピソードである。このエピソードは "Red Leaves" (1930年発表) と "Appendix: the Compsons" (1946年発行の *The Portable Faulkner* に書き下ろされたもの) で少し触れられているが、その他にも、「正義」、『行け、モーセ』の "The Old People"、それに「求愛」(執筆は1942年まで、発表したのは1948年)にまで登場する。フォークナーは余程この話が気に入っていたとみえるが、様々な登場人物の変更、発展の中で、フォークナーがここまでこの話を繰り返したことには、どのような意味があるのか、最後に考えてみたい。

イッケモテュッベがドゥームと改名するのは、次のような経緯による、と「正義」には書かれている。則ち、イッケモテュッベは、もともと頭(かしら)になる生れではないインディアンだったが、ある日ニュー・オールリンズに行って、7年経って戻ってきた。その時、彼は仔犬を何匹かと、ニュー・オールリンズの塩の入った金の小箱とを持ってくる。そしてこの塩が、どういう効き目をするのか (つまり、どれ程毒が強いのか) ということを示すために、仔犬に塩の入った団子を食べさせる。すると仔犬は程なくして

死ぬのである。その後で彼は次のようなことを言う。

> "My name is Doom now," Doom said. It was given me by a French chief in New Orleans. In French talking, Doo-um; in our talking, Doom."
>
> "What does it mean?" Herman Basket said.
>
> He said how Doom looked at him for a while. "It means the Man," Doom said. (p. 348)

"the Man" というのは、ここではインディアンの頭(かしら)のことであるが、"man" には「人間」という意味もある。インディアンにとっては、酋長とは人間の中の人間、いわば人間の代表のようなものであろうか。さらにそれをフランス語に訳して "l'Homme", "de l'Homme" とすれば、[20] この言葉はもはや酋長という意味を表わすというよりも「人間」という言葉を直訳したものという方が当っているであろう。そしてそれを、"Doom" と英語読みにした。"the Man" という言葉にこだわれば、この Doom という名前は、酋長であるイッケモテュッベ、そして人間の代表であるイッケモテュッベ、つまりは人間の性質を表わすようである。Barth もこの箇所について、"[D]oom becomes synonymous with man himself" と指摘し、「人間が呪われている」という部分に、宗教的な原罪の意味を見ているが、[21] イッケモテュッベが自分の名前は Doom だと言う時、彼は自分が頭(かしら)だと示しているのと同時に、人間一般の情況を指して(「正しい人はいない。一人もいない」[22])、人間が罪ある「呪われた」存在であると言っているとみて良いであろう。

繰り返し使われるにもかわらず、イッケモテュッベがドゥームと名乗るエピソードには、例えばサムが人物の幅を持たされたり、サムの話を聞く相手がクェンティンからアイクに変更されるといったような大きな変更はない。せいぜい、イッケモテュッベの連れて帰った仔犬を入れているのが

ぶどう酒籠か（「昔の人々」、「求愛」）大きな箱か（「正義」）という程度の、小さな違いがいくつかある位である。しかし枝葉末節の違いは別にして、ニュー・オールリンズから帰って来たイッケモテュッベが、何やら不可解な方法で即位しドゥームと名乗ることについては、驚くべき正確さで繰り返される。

人間が Doom であることを、フォークナーの作品の中で具体的に検証してみよう。フォークナーのインディアンは、インディアンとしての美徳を備えた人間から、次第に堕落の一途をたどっていったと言えるのではないだろうか。そういう点からみれば、双方の作品でイッケモテュッベが登場する、「求愛」と「正義」を比較すれば、興味深いことがわかるようである。

「正義」の中に出てくるイッケモテュッベは、既に Doom と呼ばれているが、彼はかなり倫理的にも腐敗した人物であると描かれている。彼は酋長になるために身内を殺すし、また、白人が行っている、黒人の人身売買をしている。ここでのドゥームの「悪人ぶり」は、アメリカがピューリタンの国として出発しながら、やはり悪の道を歩かざるを得なかったという、宗教的に言えば「罪」のための現実を示していると言える。

「正義」と「求愛」の両作品には、蒸気船の水先案内人が出てくるが、もともとどちらの作品に於ても David Callicoat とその名が記されていた。しかしフォークナーは「求愛」が1948年に雑誌に載せられる際、名前の変更を求めている。この作品が *The Swanee Review* に載ることになった際、彼は次のようなことを手紙に書いているのである。

> ただし男の名前がキャリコートなのをディヴィッド・ホガンベックに変えてくれ。あの短篇を書いたときにはまだぼくのヨクナパトーファ系図が整理されてなかった。蒸気船のパイロットであるデイヴィッド・ホカンベックは『行けよモーセ』の猟師ブーン・ホガンベックの祖父なのだ。必ずこの変更を忘れないでください。[23]

実はキャリコートもまた、「正義」の話の中ではドゥームに殺されていたようなのである。[24] そして「求愛」では、フォークナーはキャリコートを『行け、モーセ』に出てくる、Boon Hogganbeck の祖父に変更した。「求愛」の中のイッケモテュッベは、後にブーンという孫を持つ男と友情のある争いをする。つまりここでフォークナーが描くのが、まだドゥームとなって転落する前の人間、イッケモテュッベである。この男がまだ持っていた幾許かの美徳が『行け、モーセ』で展開され、サムやブーン・ホガンベックのような人物を生むと言っても過言ではない。キャリコートからホガンベックへの名前の変更は、そのことを物語っているのではないであろうか。

しかしそれでも、フォークナーの人間観は、必ずしも「ヒューマニズム」が主体となるものではないようである。彼は、人間には力の限界があり、ドゥームという名前に窺えるように、人間が結局は罪から逃れ得ない「呪われた」存在であると考えていたと言えるのではないであろうか。サトペン然り、コンプソン家の人々然り、フォークナーの人物たちには、後のノーベル賞受賞演説の有名な人間の不滅性を表わす言葉にもかかわらず、[25] 宿命的な影が付きまとう。“the Man” となったイッケモテュッベがドゥームと名乗るエピソードが、何度も繰り返されたことは、このことを物語っているようである。様々な登場人物が変更されたり、精神的な意味を加えられたりしている中で、フォークナーはこのエピソードだけは、初期の作品から晩年の作品に至るまで変えなかったのである。

これまで、クェンティンとアイク、サム・ファーザーズ、イッケモテュッベなどの人物のヨクナパトーファ・サーガに於ける変更、発展を主に通して、フォークナーの創作上の力点の変化を探ってきた。初期の、イニシエーションの物語になり得なかった物語が、後にイニシエーションの物語に発展していった事実があった一方で、イッケモテュッベがドゥームと名乗るエピソードは変らなかった。以上のことから、フォークナーにはヒューマニズムというよりも人間の限界を認める書き方が創作の根底に流れ続けていたと言えるのではないであろうか。

フォークナーは、一つ一つの物語、エピソードを整理し、変更して、最適な人物の組み合わせを作った。そして物語を書き続けるうちに、作品間に有機的なつながりのあるヨクナパトーファ郡を構築していった。『アブサロム、アブサロム！』と『ポータブル・フォークナー』に付けた二枚の地図はその一つの結果であろう。森林と共に滅び行くインディアンたちの伝統や、黒人奴隷制の行く末、さらには人間の力の限界までをフォークナーは描いた。一つ一つの人物や物語の系図を考えながら、自分の知っている南部の町を徹底的にリアルに描き出すことによって、フォークナーは逆に、南部に留まらない人間のドラマをヨクナパトーファに現出することができたのである。

Notes

1 William Faulkner, "A Courtship," in *Penguin Collected Stories of William Faulkner* (Harmondsworth: Penguin Books, 1985), pp. 379-80.

2 フォークナーの作品の宗教的なテーマや、聖書への言及について詳しく論じたものに Doreen Fowler and Ann J. Abadie, ed., *Faulkner and Religion* (Jackson: Univ. Press of Mississippi, 1991); Jessie McGuire Coffee, *Faulkner's Un-Cristlike Christians: Biblical Allusions in the Novels* (Ann Arbor: UMI Research Press, 1983); J. Robert Barth, S. J., ed., *Religious Perspectives in Faulkner's Fiction: Yoknapatawpha and Beyond* (Nortre Dame: Univ. of Notre Dame Press, 1972)、等がある。

3 フォークナーが実際にこの作品を執筆したのは「1928年春頃から10月にかけてのことらしい」。大橋健三郎, "Introduction,"『響きと怒り: 英潮社新社ペンギンブックス』(英潮社新社, 1973), p. 4.

4 Michael Millgate, *The Achievement of William Faulkner* (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1978), p. 86.

5 Faulkner, "A Justice," in *Penguin Collected Stories of William Faulkner* (Harmondsworth: Penguin Books, 1985), p. 360. 以後この作品からの引用は本文中に示す。

6 Valerie Eliot, ed., *T. S. Eliot The Waste Land: A Facsimile and Transcript of the Original Drafts Including the Annotations of Ezra Pound* (London: Faber and Faber, 1971), p. 140.

7 Max Putzel, *Genius of Place: William Faulkner's Triumphant Beginnings* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1985), p. 232.

8 Putzel, p. 232.

9 Cf. Faulkner, *Go Down, Moses* (New York: Random House, 1942), pp. 361-63. アイクは、白人男性の子供を産んだ混血の女性に、出て行ってよそで暮らすようにと言うだけである。

10 Faulkner, *Moses,* p. 283. 土地を放棄すると言ったアイクに、従兄の McCaslin は "Escape" と言っている。

11 「正義」を書く直前に書かれた "Red Leaves" にも Had-Two-Fathers という人物が出てくるが、これはサムではなく、ドゥームの孫の側近という設定の男である。フォークナーは「紅葉」を書いた後、そこに登場した人物の設定を様々に変えていったらしい。いま一つの例は Issetibbeha で、「紅葉」では彼はドゥームの子だが、「正義」、「求愛」、『行け、モーセ』ではドゥームの伯父である。

12 Faulkner, *Moses,* p. 166.

13 アリストテレスは、悲劇の主人公は「非常な名声と繁栄を享受しているようなたぐいの人でなければならない。たとえば、オイディプス、テュエステス、その他同じような家柄出身の著名な人たちである」と述べている。笹山隆訳注,『アリストテレス「詩学」』(研究社, 1968), p. 41。『行け、モーセ』では、サムが「正義」の設定とは違って, 酋長の息子であるため、物語は酋長一家のことになる。

14 Faulkner, *Moses,* p. 295.

15 Faulkner, *Absalom, Absalom!: The Corrected Text* (New York: Random House, 1986), p. 194. 妻に黒人の血が混じっていたと知ったサトペンは、金銭的な保障だけをして妻子を捨てる。

16 Faulkner, *Moses,* p. 166.

17 注14の引用参照。

18 Mick Gidley, "Sam Father's Fathers: Indians and the Idea of Inheritance," in *Critical Essays on William Faulkner: The McCaslin Family,* ed. Arthur F. Kinney (Boston: G. K. Hall & Co., 1990), p. 126.

19 Faulkner, *Moses,* p. 278.

20 Faulkner, "Appendix: The Compsons," in *The Portable Faulkner,* ed. Malcolm Cowley, Rev. ed. (New York, 1967; rpt. Harmondsworth: Penguin Books, 1983), p. 704.

21 Barth, "Faulkner and the Calvinist Tradition," in Barth, *Religious Perspectives,* p. 25.

22 ローマの信徒への手紙3章10節，聖書，新共同訳（日本聖書協会，1987）

23 Joseph Blotner, ed., *Selected Letters of William Faulkner* (New York: Random House, 1977), p. 268. 訳は志村正雄氏のものである。「訳者解説，」『フォークナー全集24』（冨山房，1981), p. 405。

24 本人を抹殺しなければ蒸気船の水先案内人ディヴィット・キャリコートの名前をかたるということはできない。

25 Faulkner, "Address Upon Receiving the Nobel Prize for Literature," in *The Portable Faulkner,* ed. Malcolm Cowley, Rev. ed. (New York, 1967; rpt. Harmondsworth: Penguin Books, 1983), p. 724.